

記者発表資料・1992年6月9日



Blue
Planet
Prize

旭硝子財団が地球環境保全の功績に贈る

「ブループラネット賞」第1回受賞者は
学術賞・米国の真鍋淑郎博士(地球流体力学研究所)
推進賞・英国の国際環境NGO<I I E D>

International Institute for Environment and Development
に決定しました。

*ブループラネット賞贈賞発表文

添付資料として

- I 受賞者からのメッセージ
- II 真鍋淑郎氏 略歴
- III I I E D 活動歴
- IV ブループラネット賞 概要
- V 季刊ブループラネット
- VI a f n e w s

この件についてのお問い合わせは

旭硝子財団

東京都千代田区丸ノ内1-4-2

東銀ビル TEL 03-3285-0591

担当・平野、増田



EARTH YEAR '92

(財)旭硝子財団

〒100 東京都千代田区丸の内1-4-2 東銀ビル12F TEL (03) 3285-0591 FAX (03) 3285-0592

ブループラネット賞の第1回受賞者を発表します。

- 1 旭硝子財団は、昨年4月に地球環境問題のさまざまな分野で貢献し、成果をあげた人（もしくは組織）を顕彰する「ブループラネット賞」を発足させましたが、このほど1年間の選考過程を終え、「ブループラネット学術賞」（研究業績に与えられる）を米国海洋大気庁上級管理職・真鍋淑郎博士に、「ブループラネット推進賞」（実践に与えられる）を英国のNGOとして21年の実績をもつ国際環境開発研究所（I I E D ; International Institute for Environment and Development）に贈呈することを決定しました。副賞の賞金は、各5000万円です。
- 2 「ブループラネット学術賞」を受賞される米国の真鍋淑郎（まなべしゅら）氏は、米国環境科学庁地球流体力学研究所に招かれた1950年代末から一貫して、二酸化炭素などの温室効果ガスが大気の構造を決定する上で重要な役割を果たすことを定量的に解明し、大気の流れをコンピューターによってシミュレートする大気大循環モデルを開発、またこれと海洋大循環を組み合わせた大気-海洋結合モデルの開発にも成功、常に気候モデルに関する分野で指導的な役割を演じ続けてこられました。今日、地球温暖化およびそれに伴う気候変動の予測に非常に大きな貢献をしておられ、気象学者としても世界的に極めて優れた研究者でいらっしゃるなどが贈賞の理由です。1990年の「気候変動に関する政府間パネル」（I P C C）の気候変化予測に関する報告書の執筆責任者の1人にもなられております。

真鍋博士は、1958年以来、今日まで米国で生活・研究し、米国籍を取得されています。
- 3 「ブループラネット推進賞」を受賞される英国のI I E D（国際環境開発研究所：International Institute for Environment and Development）は、1971年、Think globally, Act locally（地球的規模で考え、足元からの行動を）と唱えたバーバラ・ウォードさんらの尽力で設立された地球環境保全の活動を国際的に実践している民間シンクタンクです。創立当初から「その土地の環境になじむものでなければ、本当の発展にはならない」として“持続可能な発展”を提唱し、先進諸国のほかに、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカ諸国などで地元の人々と一緒に活動してこられました。その活動は、エネルギー計画や環境経済から、持続可能な農業、乾燥地管理、都市計画などきわめて多彩多岐にわたっており、研究成果を政策に結び付け、また多くの情報ネットワークを設けて、世界中の人々に最新の研究と実践の情報を提供するなど、地道で息の長い活動が、評価されました。

I I E Dが、こうした国際賞を受けるのは、これが初めてです。

4 選考の経緯：平成3年7月に国内外の推薦人約2000名（うち海外は73か国約900名）に候補者の推薦を依頼し、9月末の締め切りまでに、学術賞約60件、推進賞約90件、合計約150件の推薦がありました。分野の内訳は次の通りです。

大気関係・20%、水域関係・7%、地・生物圏関係・37%、その他・36%
海外アドバイザー数名を含む選考委員会での度重なる選考を経て選考委員会案を作成し、本年4月初めのブループラネット賞顕彰委員会、次いで旭硝子財団理事・評議員会で正式に決定されました。

5 選考過程での留意点

学術賞・地球温暖化が言われるはるか以前から温室効果気体の影響を予測する数値モデルを開発した、その先駆性は瞠目に値する。

- ・地球温暖化とそれに伴う気候変化の研究では、常にトップランナー。
- ・30数年にわたって気候モデルを継続して発展させ、気候変動予測の精度を高めてきた。
- ・1990年にネイチャー誌に発表した大気・海洋結合モデルを使つての二酸化炭素増加による気候変化の実験は、世界唯一。その影響は大きい。
- ・これによつて「気候変動に関する政府間パネル」（IPCC）の報告書も確実性の高いものになっている。

推進賞・早くから途上国における持続可能な開発を模索し、たくさんの現場で効果をあげてきた。

- ・単に研究だけでなく、多くのNGOや政府、産業界、大学と連携をとりながら、実際に途上国現地に根付いた活動をしている。
- ・「持続的発展」という原則をはっきりもち、地味を厭わず、資金難を乗り越え、地道な活動をしている。
- ・特定政府の外交や開発戦略から中立的立場を守り、NGOとして活動。
- ・途上国の環境ニュースを丹念に紹介してきた。
- ・正確かつ有用な情報を、多くの出版物で世界的に提供。

表彰式と記念講演会・シンポジウムは、9月24～25日に東京で行なう予定です。

真鍋 淑郎 氏からのメッセージ

第1回ブループラネット賞学術賞を受賞して

旭硝子財団の国際環境賞・ブループラネット賞（学術部門）、しかもその第1回受賞者に選ばれて、こんなに嬉しいことはありません。財団の方々に心からお礼を申し上げます。顧みるにこの受賞は、34年間にわたる私どもの気候変動モデル研究をあらゆる面で支えて下さった米国海洋大気局／地球物理流体力学研究所の前所長ジョセフ・スマゴリンスキ氏、ならびに現所長ジェリー・マールマン氏のおかげでもあります。両氏に深く感謝いたします。また、将来の気候変動を予測するための海洋・大気結合モデルの構築に共同であたってきたカーク・ブライアン博士、ロナルド・スタウファー氏を初めとする研究所スタッフの方々とも、この喜びと栄誉を分かち合いたいと思います。

今後は、若い世代の研究者とも協力し合って、将来の気候変動の予測精度をより一層向上させ、地球規模の変化に有効対処できる戦略の開発に力を入れていきたいと考えております。

IIEDからのメッセージ

困難な闘いに勇気と理想を鼓舞されました

IIEDは、開発と環境保全の活動に与えられる「ブループラネット賞推進賞」に選ばれましたことを、大変名誉に思います。IIED理事長のサー・クリスピン・ティッケルは、当研究所全体の感謝と喜びを表して、今回の受賞は環境と開発の調和的推進が困難な時期に私たちの勇気と理想を鼓舞してくれるものだとして述べました。

エグゼクティブ・ディレクターのリチャード・サンドブルックは、さらに次のように語っています。

「私たちは、独立の研究機関として、環境の保全と開発の必要性を折り合わせるよう、常に努力してきました。私たちは、社会のさまざまなレベルで政府や企業、NGOのグループと密接に協力して活動してきました。その経験から、適切な動機と行動の自由があれば、人々は長期的視点で環境に配慮するものだということが分かります。しかし人々が行動の自由と必要な動機とを手にするには、まだまだ闘わねばなりません。とりわけきわめて貧しい人々についてそうした闘いが必要であり、IIEDはこのことに大きな関心を寄せて行動しています。

IIEDは、貧しい人も富める人も含めて、持続可能な発展に努力しているこの地球社会に今後とも奉仕していけるように、名誉あるブループラネット賞を生かしていきたいと思っております」

添付資料Ⅱ

真鍋淑郎氏 略歴

まなべ しゅくろう

- 1931年9月21日、愛媛県宇摩郡新宮村に生まれる。
1953年 東京大学理学部卒業
1958年 米国環境科学庁（ESSA）地球流体力学研究所（GFDL）から招かれて研究官に就任
1959年 同大学で理学博士号取得
1963年 同 上級研究官
1968年 米国海洋大気庁（NOAA）／GFDL上級研究官
1979年 同 上級管理職
現在に至る。

主な活動

- 1968年～ プリンストン大学大気海洋科学講座・教授待遇講師
1971～75年 世界気象機関（WMO）「大気汚染が大気の力学的ふるまいに及ぼす影響に関する大気科学委員会作業部会」の委員
1972～78年 国際測地学・地球物理学連合（IUGG）気象力学委員会委員
1972～80年 米国学術会議（NRC）気候変動委員会委員
1974～77年 米国気象学会（AMS）放射エネルギー委員会委員
1974～80年 NRC地球大気開発計画（GARP）国内委員会委員
1978～82年 AMS気候変動に関する委員会委員
1979～82年 IUGG気候変動委員会委員
1980～81年 NRC気候調査委員会委員
1981～87年 WMO／国際学術連合会議（ICSU）／国連環境計画（UNEP）の世界気候研究計画合同科学委員会（JSC）委員
1983年 東京大学理学部地球物理学研究所・招聘教授
1985～87年 プリンストン大学大気海洋科学講座委員会委員長
1986～88年 WMO／ICSU／UNEP JSC温室効果諮問部会委員
1987～88年 WMO／ICSU／UNEP JSC全球エネルギー水循環実験計画（GEWEX）フィージビリティ調査委員会委員
1988～90年 NRC水理科学の将来性に関する委員会委員
1988～92年 アラスカ大学地球科学研究所科学レビュー委員会（大気科学部門）委員
1988年～ NRC大気科学および気候に関する委員会委員
1988年～ NOAA気候および全球変化委員会委員

1989～90年	WMO/UNEP気候変動に関する政府間パネル（IPCC） 第1作業部会報告書（科学的評価）執筆責任者
1989～90年	NOAA気候および全球変化委員会データ管理小委員会委員
1989年～	大気研究のための大学間協力計画（UCAR）気候系モデル計 画科学諮問委員会委員
1990年～	NRC地球科学、環境および資源に関する委員会委員
1990年～	NOAA気候および全球変化委員会モデルセンター小委員会委 員
1990年～	米国科学アカデミー会員

著 作 論 文

（この他に多数あり）

- 「水循環を取り入れた大循環モデルの気候論」（共著）
Monthly Weather review 1965
- 「気温の二酸化炭素濃度への依存性」
Proceedings of AAAS Air Pollution Session 1970
- 「気候改変と大気循環の数値モデル」 Proceedings of Joint symposium
Commemorating the Centennial of the US Weather Service and Golden
Anniversary of the American Meteorological Society 1970
- 「大気中の二酸化炭素濃度増加による将来の気候変化予測」
Man's impact on the climate 1971
- 「将来の気候感応度の研究のための、季節変動を取り入れた全球大気—海洋結合モデ
ル」（共著） Dynamics of Atmospheres and Oceans 1979
- 「全球気候数値モデルによる二酸化炭素の気候に対する感応度の研究」（共著）
Nature 1979
- 「大気中の二酸化炭素濃度を増加させたことによる夏季の乾燥化」（共著）
Climate Change 1981
- 「大気中の二酸化炭素濃度増加に伴う夏季土壌水分量の減少」（共著）
Science 1986
- 「二酸化炭素変化に対する大気—海洋結合モデルの動的応答に見られる南北半球の非
対称性」（共著） Journal of Physical Oceanography 1988
- 「大気中の二酸化炭素が漸増したときの気候変化」（共著） Nature 1989
- 「中緯度の山岳および乾燥地帯の気候」（共著） Science 1990
- 「地球温暖化によって熱帯低気圧の発生数と強度は増加するか？」（共著）
Geophysical Research Letters 1990
- 「平衡状態の気候変動および将来の気候変動についての示唆」（共著）
Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC) Report August 1990

受賞歴

- 1966年 「日本気象学会 藤原賞」
大気の大熱バランズおよび放射平衡に関する研究
- 1967年 「米国気象学会 マイジンガー賞」
(スマゴリンスキー、ミンツ、荒川、レイズと共同受賞)
大気の運動に関するプリミティブ方程式系を直接用いることにより、大気の力学的挙動を数値的にモデル化しようとする先駆的な努力を通じた個人的およびグループとしての気象力学への卓抜した功績
- 1970年 「米国商務省 優秀な業績に対する金メダル賞」
大気-海洋結合系の数値モデル化に関する研究で優れた業績。その研究を通して人類に貢献した功績
- 1974年 「NOAA/環境研究所 優秀著作賞」
論文「全球大気モデルの時間積分から得られる熱帯循環」
- 1976年 「NOAA 科学研究功績賞」
大気大循環、気候モデル、シミュレーションの分野におけるきわめて優秀な著作および国際的な指導性
- 1977年 「米国気象学会 第2回50周年賞」
大気の力学と物理に関する数値シミュレーションを通して、放射過程が気候に及ぼす影響についての理解を促進した卓抜した功績
- 1980年 「NOAA 長官賞」
全球気候に関する卓抜した科学的研究
- 1987年 「NOAA/環境研究所 優秀著作賞」
論文「氷河期の気候に及ぼす大陸氷床の影響」
- 1989年 功績のあった管理職に対する「米国大統領表彰」
- 1990年 「NOAA/環境研究所 優秀著作賞」
論文「海洋-大気結合モデルにおける2つの安定平衡」
- 1990年 米国科学アカデミー選任

IIED活動歴

(International Institute for Environment and Development)

- 1971年 バーバラ・ウォードらにより設立。初代所長はジャック・レイモンド。
- 1972年 バーバラ・ウォード著「かけがえのない地球 Only One Earth」発行。
この本は、ストックホルムで開かれた国連人間環境会議で非公式の教科書となる。
- 1972年 バーバラ・ウォード、2代めの所長に就任。IIEDの指導理念「持続可能な発展」が鮮明になる。
- 1975年 国連環境プログラム（UNEP）の援助の下に地球環境情報サービス部門「アーススキャン（Earthscan）」を発足させ、各国の政府機関、報道記者、企業、一般市民などに情報や資料を提供。アーススキャンは環境・開発問題に関する世界有数の情報発信機関となり、IIEDの活動の基礎ともなった。1984年のアフリカの飢饉の原因を明らかにし、水道敷設の必要性を強調し、また女性と環境とを結びつけ、解決すべき環境テーマの多くについて報告書を出した。のちアーススキャンは、IIEDの出版部門となって、数多くの貴重な本を発行。
- 1976年 都市環境問題に取り組み、国連の人間居住センター（Habitat）プログラムに協力。
- 1970年代末 欧州におけるエネルギー政策の転換に取り組む
- 1979年 エネルギー政策の古典ともなった報告書を発行。エネルギー消費量を減らしながら、経済発展を維持する方向について提言。
- 1980年 魚類やクジラ的环境科学に取り組み開始（クジラ、アザラシ、魚、オキアミ等の生息数量の調査。その結果に基づいて国際捕鯨委員会が開催される）。

- 1984年 熱帯林保有国の政府と木材買い付け業者を集めて、世界で初めての持続可能な森林政策について討議。
熱帯林アクション・プラン、国際熱帯木材機関の創設と活動に協力（1988年に木材産出国の熱帯林を調査・報告）。
- 1985年 世界資源研究所と共同で「World Resources Report」（隔年発行）を制作。
この頃から、プロジェクトごとの具体的解決策に力をいれるようになる。
- 1987年 英国放送協会（BBC）のテレビ番組「かけがえのない地球」シリーズ（11回）の企画制作に協力。
- 1988年 I I E D - A L（International Institute for Environment and Development-America Latina）が、従来の I I E D 南米支部から、独立した組織へと変身。理念は、I I E D と同じだが、都市問題（とくに都市貧困層と環境の問題）を重点的に取り組む。本拠はアルゼンチンのブエノスアイレス。
- 1988年 政府やNGOなどに環境関連情報や技術支援を与えたり指導・訓練を行なう I I E D フィールド・サービス部を創設。協力関係にある研究機関の人材をあっせんもする。イギリスのODA実施に要員を派遣する協定をイギリス政府と結ぶ（ODAに関する活動例：ガーナの環境保護カウンシルの研究所設立を支援、ザンベジ川の水力発電ダム の環境影響評価、熱帯林アクション・プランの状況評価、カリブ地域の気候変化研究の枠組み作成、中国の経済開発と環境に関する北京会議への参加など）。

以上のほかに、I I E D は現在、たくさんの地球環境保全活動をサポートしています。その一部をご紹介しますとー

- 世界の隅々から“飢え”をなくすには、先進諸国からの援助や大規模な農業増産投資よりも、地域の生産システムの中で再生可能資源を最大利用していくことが大切だとして、I I E D の「持続可能な農業プログラム」が、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの現地農業の知恵とその科学的裏付けなどを調査。野生の食物や入会地の重要性、土地利用における地域住民の知恵の重視などについて調査。
- “持続可能な開発”の観点から森林の保護について、伐採と植林・植樹を調査する「森林と土地利用プログラム」を実施。国際熱帯木材機構（ITTO）や熱帯林アクション・プラン（TFAP）の活動を支援。
- I I E D の「乾燥地プログラム」が世界の乾燥地帯、準乾燥地帯について調査・提言。

アフリカで乾燥地問題のワークショップを開催。アフリカの“Wetlands in Drylands”プロジェクト、アフリカの地域住民の土壌・水資源保全法の実地調査などを現地組織に協力して実施。乾燥地問題の雑誌「Haramata」を次の「南のネットワーク・プログラム」と共同で発行している。

● I I E Dの「南のネットワーク・プログラム」が、自力発展に努力するアフリカのNGOを支援。

● I I E Dの「人間居住プログラム」が、都市問題（とくに貧困層の健康、環境と開発の問題）について、ケニア、ナイジェリア、インドなど第三世界の諸都市で調査。WHOや国連人間居住センターなどと協力。年に2回、雑誌「Environment and Urbanization」を発行している。

● I I E Dの「気候変動プログラム」が、気候の変動と開発の関係を究明すべく、ベトナムの米作、ジンバブエの薪利用と森林、タンザニアの食料安保、ボツワナの生態系影響、コスタリカおよびニカラグアの森林管理などを調査。地球温暖化と第三世界の関係を扱った季刊誌「Tiempo」を発行。

● I I E Dの「環境経済プログラム」が、持続可能な資源利用を実現するには経済政策をどうすべきかについて調査。この調査は、I I E Dとユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）が4年前に設立した「ロンドン環境経済センター」（LEEC）が中心となっていて行なっている。

● I I E Dの「フィールド・サービシズ・プログラム」では、“持続可能な開発”を求めて活動する全世界の団体に対して、経験と知識に基づく助言や技術的援助を行なっている。

● I I E Dのスタッフは現在、環境専門家約40名、支援スタッフ約20名。

I I E Dのチェアマン： サー・クリスピン・ティッケル Sir Crispin Tickell
エグゼクティブ・ディレクター：リチャード・サンドブルック Richard Sandbrook